

白川の関

歌枕¹として、白河の関は古来有名である。ここより外は陸奥^{みちのく}として、人々の旅情をかきたてる場所であった。松尾芭蕉²「奥の細道」の白河(白川)の関の条には、この歌枕を読み込んだ古歌の一節がさりげなく引用されている。

みちのくにの白河関こえ侍りけるに

平兼盛⁴

たよりあらばいかで都へつげやらむけふしら川の関はこえぬと

1 福島県白河市にあった奥州街道の関所。
2 芭蕉「おくのほそ道」萩原恭男校注、岩波文庫七九(一九九一)。
3 蓑笠庵梨一「奥細道菅菰抄」(おくのほそみちすがもしよ)。文献に付録として掲載)の注釈が、典拠を明らかにしている。

陸奥に修行してまかりけるに、白河の関にとまりて、ところからにや、常よりも月おもしろくあはれにて、能因が「秋風ぞ吹く」と申しけむ折、いつなりけむと思ひ出でられて、余波多くおぼえければ、関屋の柱に書きつけける西行法師⁶

白河の関屋を月の洩るからに人の心をとむるなりけり

4 たいらのかねもり。？く九九〇。平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。従五位下駿河守。家集に「兼盛集」がある。
5 「拾遺集」別・三三九
6 さいぎょうほうし。一一一八〜一九〇。平安時代末期の歌人。

みちのくににまかりだりけるに、しら川の関にてよみ侍りける

能因法師⁸

宮⁹こをば霞とともに立ちしかど秋風ぞふくしら川の関

7 「山家集」。ここでは、「西行物語」桑原博史全訳注、講談社学術文庫(一九八二)より引用。
8 のういんほうし。九八八〜？。平安時代中期の歌人。三十六歌仙の一人。

左大弁親宗

もみちざの皆紅にちりしけば名のみなりけり白川の関¹⁰

9 「後拾遺集」鬻旅・五一八番。
10

宇治前太政大臣、白河にて見行客といふ事をよめる

11 関こゆる人に問ばやみちのくのあだちのまゆみ紅葉しにきや

堀河右大臣

11 「詞歌和歌集」秋・一三〇番

13 都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白川の関

12 源頼政

12 みなもとのよりまさ。一〇四一―一八〇。從三位頼政。平安時代末期の武将・歌人。保元・平治の乱に功があった。のち、以仁王をたてて平家追討を企てたが敗れた。家集に「源從三位頼政卿集」がある。

白川院鳥羽殿におわしましける時、をのこども歌合し侍りけるに、卯花をよめる

藤原季通朝臣

13 「千載集」秋歌下・三六五

14 見て過ぐる人しなければ卯花のさける垣ねや白川の関

14 「千載集」夏歌・一四二

鞆中歳暮といへる心をよめる

僧都印性

2

15 東路も年も末にやなりぬらむ雪ふりにける白川の関

15 「千載集」鞆旅歌・五四三

後久我太政大臣通光

16 白河の関の秋とは聞きしかど初雪わくる山のべの道

16 「夫木集」卷十一

芭蕉は、白河の関を訪ねたが、この歌枕を前にして、不思議なことに俳句を残していない。弟子の曾良の句を「奥の細道」に書き留めている。

卯の花をかざしに関の晴着かな

1 歌枕とは、和歌に引証される地名のこと。

10 「千載集」秋歌下・三六四